

祢宜弥遺跡Ⅰ

(平成10年度 袋井市祢宜弥土地区画
整理事業に伴う発掘調査報告書)

2001.3

静岡県袋井市教育委員会
袋井市祢宜弥土地区画整理組合

祢 宜 弥 遺 跡 I

(平成10年度 袋井市祢宜弥土地区画)
(整理事業に伴う発掘調査報告書)

2001.3

静岡県袋井市教育委員会
袋井市祢宜弥土地区画整理組合

例 言

1. 本報告書は平成10（1998）年8月25日～平成11（1999）年3月25日の期間に、袋井市愛野字馬込588番地他34筆で実施された杵宜弥（ねぎや）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、袋井市杵宜弥土地区画整理事業に伴う開発のうち、道路の建設予定地部分の発掘調査である。なお、本工事計画のうち、道路歩道部分・安全地帯・緑地帯については発掘調査は実施されていない。
3. 発掘調査は静岡県教育委員会文化課の指導を受けて袋井市教育委員会が実施した。
4. 今回の発掘調査・報告書執筆は永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。
5. 杵宜弥遺跡における試掘調査・発掘調査の履歴は下記のとおりである。

発掘調査	調査年度	試掘調査・発掘調査の原因	調査担当者
試掘調査	平成6年(1994)	小笠山総合運動公園整備に係わる周辺河川改修事業 (静岡県袋井土木事務所)	吉岡 伸夫
試掘調査	平成9年(1997)	袋井市杵宜弥土地区画整理事業(遺跡範囲確認)	永井 義博
第Ⅰ次調査	平成10年(1998)	袋井市杵宜弥土地区画整理事業	永井 義博
第Ⅱ次調査 (予定)	平成13年(2001)	袋井市杵宜弥土地区画整理事業	未 定

6. 杵宜弥遺跡の袋井市教育委員会遺跡略号は「TNE」である。
7. 現地の発掘調査にあたっては杵宜弥土地区画整理組合の皆さんには大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。
8. また、区画整理課の皆さんには区画整理事業と埋蔵文化財調査の円滑な調整について企画段階から発掘調査終了まで多大な理解と協力を得ました。特に金原基弘氏、杉山典克氏、飯田理明氏にはたびたび発掘現場まで足を運び調整にあたっていただきました。
9. 袋井市教育委員会側の発掘調査体制（平成10年度）は次のとおりである。（敬称略）

教 育 長 浅井 通男	教育次長 前田富美雄	生涯学習課長 小粥 保夫
文化財係長 吉岡 伸夫	主 査 永井 義博	主任学芸員 松井 一明
主任学芸員 水野 雅彦	学 芸 員 白澤 崇	経 理 事 務 鈴木寿美子

（杵宜弥遺跡調査参加者）

大庭 嘉平	山本 善久	高橋 邦夫	加藤 友平	川島 良一
鈴木 定雄	高橋 昭雄	山本 修	高橋 四郎	佐藤 好孝
兼岡 進	浅野しづ江	戸倉百合江	乗松 つね	鈴木 敏子
戸倉みつ子	山崎 好江	山下 悦子	大庭 京子	高木 啓子

10. 本発掘調査は静岡県教育委員会教育長 杉田 豊より袋井市杵宜弥土地区画整理組合理事長あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工等事について（通知）」（教文第3-48号・平成10年7月9日付け）の指示によるものである。
11. 平成10年度 杵宜弥遺跡発掘調査の資料は袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	2
第3章 調査の方法	3
第4章 地理的環境・歴史的環境	4
第5章 遺構	5
第6章 遺物	7
第7章 まとめにかえて	8
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 秣宜弥遺跡位置図(1/50,000)
第2図 秣宜弥遺跡発掘調査地点(1/2,500)
第3図 秣宜弥遺跡南地区実測図(1/200)
第4図 秣宜弥遺跡北地区実測図(1/200)

写真図版目次

図版 1

- (1) 北地区完了写真 (西より)
- (2) 南地区完了写真 (西より)

図版 2

- (1) 重機による表土除去作業
- (2) 遺構の発掘作業

図版 3

- (1) 南地区完了写真 (西より)
- (2) 全景 (南東より)

図版 4

- (1) 南地区東側完了写真 (北西より)
- (2) 発掘調査のようす

図版 5

- (1) 土壌009遺物出土状況 (北より)
- (2) 土壌009完了写真 (南より)

図版 6

- (1) 発掘調査のようす
- (2) 遺物出土状況

図版 7

- (1) 溝跡025弥生土器出土状況
- (2) 溝跡008の発掘のようす

図版 8

- (1) 溝跡010土器出土状況
- (2) 溝跡025出土状況

図版 9

- (1) 溝跡030の発掘のようす
- (2) 溝跡030の弥生土器の出土状況

図版10

- (1) 溝跡030の弥生土器
- (2) 溝跡030の完了写真

図版11

- (1) 北地区の完了写真（東より）
- (2) 北地区の完了写真（西より）

図版12

- (1) 旧河道の完掘写真（西より）
- (2) 旧河道の発掘のようす

図版13

- (1) 北地区の柱穴群（北より）
- (2) 北地区の柱穴群（東より）

図版14

- (1) 北地区の発掘のようす
- (2) 北地区溝跡113完掘のようす

図版15

- (1) 中世の住居跡SX2（西より）
- (2) 住居跡SX2より出土した山茶碗

第1章 調査に至る経過

袋井市愛野地内に所在する周知の埋蔵文化財・祢宜弥遺跡は「袋井市祢宜弥土地区画整理事業」に伴って平成10（1998）年度より発掘調査が開始された。発掘調査に至る経緯は次のとおりである。

まず祢宜弥遺跡発見は比較的最近のことで、県営の小笠山総合運動公園建設に伴って排水流路整備のため袋井土木事務所が袋井市教育委員会に平成6年9月12日付け袋土第1187号の文書により袋井市愛野地内の遺跡の試掘調査の依頼を行ったことから始まる。これを受けて袋井市教育委員会は9月19日～9月22日にかけて袋井土木事務所職員と市都市整備課職員の立会の元、開発予定地内の試掘調査を行った。この試掘調査によって、祢宜弥公会堂の東側と上石野公会堂付近の2ヶ所に埋蔵文化財（弥生時代・古墳時代の集落跡か）が確認されたと平成6年10月27日付け袋教生第179号の試掘調査報告書には記載されている。

平成8年12月13日、愛野新駅の建設に関連して愛野地区の区画整理事業での埋蔵文化財の取り扱いについて、区画整理課・都市整備課・教育委員会の3者による打合せ会が実施された。この中で、3者は袋井土木事務所関連の試掘調査結果をもとにして、遺跡の所在について確認したが、区画整理事業は袋井土木事務所の事業よりさらに広範囲を対象とするため所在調査・試掘調査を実施して埋蔵文化財の包蔵する範囲の確定を急ぐこととなった。

平成9年2月17日、区画整理課より愛野新駅建設・区画整理事業に関連して埋蔵文化財の試掘調査を実施してほしいとの依頼があった。平成9年3月7日袋区第157号にては、袋井市愛野地内の試掘調査の依頼が正式に提出された。そこで、平成9年4月8日～11日に祢宜弥・上石野の区画整理事業計画地内の試掘調査を実施し埋蔵文化財包蔵地の範囲の確定を行った。

ちょうど、この頃、全国的に発掘調査の取り扱いの見直しが話題となっており、静岡県教育委員会に問い合わせたところ、平成10年6月29日に祢宜弥遺跡の発掘調査について次のような回答があった。祢宜弥遺跡では、発掘調査の新基準を先取りし「道路用地（歩道を除く）は従来どおり発掘調査が必要であるとのこと。道路用地（歩道部分）については慎重工事の取り扱いとすること。商業地・住宅地については直ちに発掘しないで、店舗・住宅等の建設計画が具体化したところで対応すること。工事等により遺構面破壊される恐れのある場合は対象地すべてが発掘である。」との指示であった。これにより、新しい発掘基準を援用すると、今まで袋井市内で実施されてきた区画整理事業の発掘調査と異なり、祢宜弥遺跡の場合は計画道路の車道部分のみが対象となった。

発掘調査に取り掛かるため、平成10年6月23日付けで袋井市祢宜弥土地区画整理組合理事長名で文化庁長官あて「埋蔵文化財発掘の通知について（祢宜弥遺跡）」（文化財保護法57条の2）が提出された。これを受けて平成10年7月9日付け教文3-48号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（祢宜弥遺跡）」の通知が静岡県教育委員会教育長名で袋井市祢宜弥土地区画整理組合理事長あて送付され、区画整理事業着手前の発掘調査（袋井市愛野字馬込588番地他34筆）が正式に指示された。さらに、平成10年8月5日、袋井市教育委員会教育長名で「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（文化財保護法98条の2の規定）が静岡県教育委員会あて通知された。

第2章 調査の経過

平成10年 8月25日 発掘調査の委託契約締結日。

9月 1日～ 資材の手配。器材の用意。

9月 1日 発掘作業員雇用開始日。

9月28日～30日 重機による表土層の除去作業。

10月 1日～ 2日 雨天のため作業中止。

10月 5日～ 8日 重機による表土層の除去作業と排水溝の設置。

10月 9日 作業員により遺物包含層の掘り下げ作業が開始される。

10月12日～15日 作業員により遺物包含層の掘り下げ作業。

10月16日 雨天のため作業中止。

10月19日 台風被害の復旧。東側では遺構精査の開始。

10月22日～23日 西側調査区の遺構精査。

10月26日～30日 重機による表土層の除去と並行して作業員も作業を再開。

11月 2日～ 4日 重機による表土層の除去と並行して遺構検出作業。

11月10日 土壌の調査を開始する。

11月12日 土壌、溝跡等の遺構を掘りはじめる。

11月13日 遺構の調査。遺物出土。

11月16日～18日 北側の6m道路予定地の調査。

11月24日 第1回 遺跡見学会を開催する。見学者多数あり。

12月 1日～ 4日 ビット、溝跡、土壌を調査。

12月16日 南地区の東側をさらに掘り下げる。

12月21日～22日 南地区の東側をさらに掘り下げる。

12月24日 写真撮影のための清掃作業。

12月25日 ラジコンヘリコプターによる空中写真測量作業。本年の最終日。

平成11年 1月 5日～ 8日 調査再開。東南部分の掘り下げ。

1月11日～14日 遺物、遺構の実測と清掃作業。

1月19日 北地区のラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施する。現地作業終了。

1月20日 午後1時30分より第2回目の発掘遺跡見学会を開催する。多くの地元の方々が見学にきてくださる。

1月21日～27日 発掘資材等の撤去作業。

1月28日 仮設トイレのくみ取り作業。

1月29日 仮設トイレの撤去作業。

2月 1日 現場プレハブ事務所解体撤去完了。

3月25日 発掘調査委託契約終了。

第3章 調査の方法

今回の発掘調査は、杵宜弥土地区画整理事業で計画された道路部分（面積約1,200㎡）の発掘調査を行った。調査地の現況は、袋井市愛野字馬込588番地他の水田、畑地、菰蒲地である。

今回の発掘は、低湿地での調査で最初から湧水の恐れがあった。ところが、その心配は発掘調査前に襲来した台風被害によって現実のものとなった。掘削を予定していた水田部分は巨大な池となり、発掘資材は、そのほとんどが下流に流されてしまった。さらに、それ以上地元・杵宜弥地区の集落の受けた被害は大きく、排水しきれない濁流によって多くの家が被害を受けてしまった。しかし、この残念な結果は発掘調査に関しては各部に生かされ自動排水ポンプの設置から土止め作業の方法にも慎重な手法が用いられた。その結果、発掘調査中に遺跡が大きな被害を受けることはなかった。

さて、所在調査や試掘調査により、遺物包含層の分布と遺構の深度等が確認されていたため南地区の発掘調査は、開始より重機で表土から約30cm下の遺物包含層まで一気に掘削することとした。そして、重機の掘削後は作業員の手作業にて遺物の包含層を約3cmの厚さで数回にわたり掘り下げ、精査を重ねて住居跡・柱穴跡・溝跡などの検出に努めた。ただし、隣接する北地区では中世の遺物も出土していたので上層での遺構確認も行った。包含層内の遺物の取り上げには、土器等が比較的少なく一括して取り上げた。これは河川の流路に近いため数度にわたって洪水に襲われており、遺構内には遺物が残っているが、上層には遺物が残っていなかったようである。各遺構ごとの遺物は出土状況図を適宜に作成しながら、各層位、各ブロックごとに遺物を取り上げた。各層も低地の層位らしく標準土層がはっきりしており、埋立地以外ではたいへんわかりやすい層位になっていた。

今回の杵宜弥地区の区画整理事業は低湿地の工事のため埋め立て作業が中心で、現況を掘削する作業はほとんど計画されなかった。そのため、遺跡内であっても遺構、遺物を破壊する恐れのない場合は発掘調査を行わずになるべく保存する方法をとった。ただし、道路の車道部分については、発掘調査の新基準に従って発掘調査を実施した。そのため、調査区の形状も道路に沿って細長い形となった。なお、道路でも歩道部分や緑地帯は新基準に沿って発掘調査からは除外してある。今回の発掘調査は地盤の弱い低地ではあったが、区画整理課と組合側の配慮によって発掘調査区のまわりにかなり広い土地が確保できたため、掘り方の傾斜も緩やかに設定したり、犬走りをもめに設けて安全第一に努めた。それでも軟弱な場所については土止めのコンパネと丸太杭によって完全な補強をめざした。

遺跡の測量・写真撮影については、40分の1、100分の1の遺構測量図の作成は空中写真測量を使い、鳥瞰写真の撮影にもラジコンヘリコプターを使用して行った。10分の1、20分の1の遺物取り上げ図や遺構詳細図については調査員の手作業により実測を行った。この結果、遺構平面図は40分の1の図を基本として、土器の集中出土地点については10分の1の詳細図を作成することとなった。レベル等については（株）フジヤマの設置したベンチマークを使用した。遺構・遺物の写真撮影は、中型カメラ1台と小型カメラ2台を使用した。使用フィルムはモノクロフィルムは富士写真フィルム株式会社のネオパンSSを使用し、リヴァーサルフィルムも同じく富士写真フィルム株式会社のフジクローム100デライトフィルムを使用した。

第4章 地理的環境・歴史的環境

祇宜弥遺跡の位置する袋井市愛野の自然堤防上は、明治22年に愛野地区を南北に分断した東海道本線の工事以前から、わずかな微高地上に民家が点在する静かな農村地帯であった。愛野地区を昔の古い絵図等で確認すると、東から西に流れる原野谷川は狭い沖積地を大きく蛇行する流路を持ち、たびたびその流路を変えていたことがよくわかる。そのため、祇宜弥地区の家々も、たびたび洪水に襲われている歴史があった。そして、現在のようにまっすぐに整備された原野谷川になったのはごく最近のことであり、現在の地図にも旧流路の痕跡が三日月湖のように残っている場所がある。

さて、祇宜弥遺跡の成立に深い関係を持つのが、遺跡のある自然堤防を形成する元となったこの二級河川・原野谷川である。この川は掛川市八高山に源を発し、掛川市街地より流れてきた逆川や垂木川と合流し、さらに字刈川と沖ノ川の水を集めて南に向きを変え、その先の浅羽町富里で太田川と合流し太平洋へ注ぐ緩やかな流れの中規模河川である。流路を詳しく観察すると、袋井市街より以南では浅羽段丘の西を流れるが、かつてこのあたりは勾配の緩やかな流路が蛇行し、両側には典型的な自然堤防と後背低地が発達していたと言われている。

祇宜弥遺跡と同じ原野谷川中流域の弥生時代の遺跡としては、掛川市内に所在する原川遺跡、領家遺跡、梅橋北遺跡等の沖積地の自然堤防上に立地する遺跡が確認されている。この中で国1バイパス関連の発掘調査で確認された原川遺跡は、土器棺墓と掘立柱建物群が検出されており弥生時代中期中葉の集落跡と考えられている。これら、沖積地の遺跡は、圧倒的に弥生時代後期の菊川式土器を出土する遺跡が多く、この時期にこの流域が大規模に開発され、多くの人が生活する場が生まれたことを示唆している。ただし、このような氾濫の多い狭い沖積地に遺跡が確認されるということは、安定した天候に恵まれていた時代か、または土木技術が発達して少しの洪水くらいでは低地を離れることなく生活できたことを伺える事実であろう。

古墳時代の原野谷川流域といえば、上流域にあたる掛川市和田岡原の吉岡大塚古墳（前方後円墳）、春林院古墳（円墳）、行人塚古墳（線方後円墳）、各和金塚古墳（線方後円墳）、瓢塚古墳（線方後円墳）等の古墳時代中期の首長墓クラス古墳群が著名である。これらの古墳は盗掘を受けたものが多く、発掘調査を行っても遺構確認作業が多い。河川中流域では、古墳時代中期末～後期初頭ごろの字佐八幡1号墳（前方後円墳）、権現山古墳（前方後円墳）、浅間山古墳（前方後円墳?）、石ノ形古墳（円墳）が立地している。この内、石ノ形古墳の発掘は短甲、蛇行剣ほか多量の遺物を出土した、造り出し付の円墳で学会の注目を集めた調査である。

祇宜弥遺跡周辺の奈良時代の遺跡としては、原野谷川流域では佐野郡衙とも言われる袋井市坂尻遺跡があるが、逆川流域の掛川市内では規模の大きな奈良時代の遺跡は見当たらないようである。

最後に最近の調査では、原野谷川の河川の整備事業によって、掛川市域では梅橋北遺跡等の遺跡が次々と調査されている。また国一バイパスの関連では原川遺跡が調査され、小笠山総合運動公園への取り付け道路の工事関連では領家遺跡も調査されている。さらに、平成6年～8年度では、小笠山総合運動公園内遺跡群として上石野古墳群、若作古墳群、居村遺跡、居村古墳群の調査も行われ多くの成果を上げている。

第5章 遺構

弥生遺跡は、静岡大学名誉教授の加藤芳朗氏が昭和63年に刊行された『土橋遺跡発掘調査報告書』の中の「土橋遺跡周辺の地形・地質図」で表しているとおり、掛川市から流れてくる逆川によって形成された自然堤防上に位置する遺跡である。報告書の図でも、逆川が何度も小笠山の裾に接触しては弾かれて蛇行するようすがはっきりと描かれている。そのため狭い平野の各地に三日月湖が残されており、湿地と微高地が交互に点在している状況であった。

弥生遺跡の発掘調査区は、発掘調査の新基準が平成10年度から導入されるのを先取りしたかたちで採用したため、区画整理事業のうち道路の車道部分のみを発掘調査の対象としたため約1,200㎡となった。道路の歩道・緑地帯・安全地帯等は発掘調査の対象外である。住宅建設部分については、新基準では建築物が発掘調査対象除外されたため。一般住宅についてはそのほとんどが対象外となり、ビル等で基礎部分が遺構を破壊する場合のみ発掘調査を行うこととした。また、幅1m以内の小規模な掘削は工事立ち会いとした。

〈弥生遺跡の標準土層〉

弥生遺跡の標準的土層は、南地区の水田部分と北地区の畑地部分に大きく分かれている。試掘調査の結果より、第15、23トレンチをそれぞれの標準土層とする。

南地区の水田部分に位置する第23トレンチは、第1層＝水田耕作土（表土）、第2層＝水田床土（粘土質）、第3層＝灰色土層（無遺物層）、第4層＝灰色土層（遺物包含層）、第5層＝青灰色粘土層（無遺物層）となっている。第4層の遺物包含層は不安定で、出土遺物も弥生土器を中心とした破片が多く量も少ない。試掘トレンチ内では遺構も発見されていないので、遺構密度も少ないと予想される。

北地区の畑地部分では、第15トレンチで確認されたとおり、第1層＝盛り土、第2層＝褐色土層（遺構覆土）、第3層＝青灰色粘土層（無遺物層）となっている。

〈弥生遺跡南地区の遺構〉

・円形周溝遺構 S X 1

南地区の西側で検出された溝跡 0 0 8 と溝跡 0 1 0 により円形に巡る遺構である。住居跡の周溝としては、やや規模が大きく、覆土内から多量の弥生土器が出土している特徴がある。周溝墓の一種かとも思われるが埋葬主体部の位置が不明である。この場所は水田として耕作されていた場所なので、すでに削平されてしまったのかもしれない。

・井戸跡

南地区では3基の井戸が検出されているが、これらはしばらく前までこの地に残っていた寺院の井戸であることが地元の聞き取り調査で確認されている。この寺院は現在南側の丘陵部に移転している。

・溝跡 0 2 5

カギ状に曲がる溝跡で幅55cm、深さ40cmで遺構覆土内からは弥生時代後期の土器破片が出土している。遺構上部を削平された可能性があり溝跡の深い部分のみ残り検出されたようである。

・溝跡027

幅1m、長さ4m、深さ30cmの小規模な溝跡である。方形周溝墓の可能性はある。遺構上部を削平された可能性があり溝跡の深い部分のみ残り検出されたようである。

・溝跡030

南地区で検出された溝跡では最大規模のもので、幅2.3m、深さ45cm、現存する長さ4.7mである。遺構の覆土からは多量の弥生土器が出土しており、調査区外にもまたのびている可能性がある。集落内の基幹の排水路が環濠の可能性はある。溝跡の続きが平成13年度の発掘調査区で検出される可能性を持っている。

・土壌009

溝跡008と一部が重複する土壌で、長軸2.4m、短軸1.7m、深さ30cmの小規模な遺構である。土壌覆土内からは弥生時代後期の土器破片が出土している。土壌009と溝跡008の新旧関係は、ちょうど重なる部分に第15試掘トレンチが当たり確認できなかった。試掘トレンチで確認された遺物包含層はこの両遺構の覆土であることが調査後にわかった。

〈祢宜弥遺跡北地区の遺構〉

・住居跡SX2

北側調査区の西端から検出された中世の住居跡とみられる遺構で、今回の発掘区内では半分しか検出されていないが、本来は長方形の平面プランを持つ遺構と思われる。遺構内には壁溝と遺構内を区画する小規模な溝跡が検出されている。遺構規模は確認できていない。

・旧河道跡

旧逆川の河道跡がはっきりと残っている。北地区の細長い調査区の中に鋸の歯のようにギザギザの川岸跡が検出された。速い流れで川岸が削られた痕跡がよくわかる例である。ここより北側の調査区外では、さらに深く抉り取られているものと思われる。

・溝跡113

逆川の旧河道跡と幅mの距離をおいて並行にながれる小溝跡である。数mおきに木杭が打ち込まれているのが確認できる。この小溝跡と旧河道との間に堤防があって、小溝跡は堤防の内側に染み出た水を集める役目をしていたものと考えられる。旧河道跡とともに近世・近代の遺構と考えられる。

・土壌109, 110

ともに用途・時期とも不明な土壌跡である。遺物の出土はない。

・掘立柱建物跡の柱穴群

北地区東側を中心に柱穴群が検出されている。柱穴内からはほとんど遺物は出土していないが、覆土のようすから中世・近世の遺構と考えられる。

〈その他〉

低湿地に位置する南地区の遺構では、そのほとんどが弥生時代後期の菊川式土器を出土している。南地区より一段高いレベルの北地区の遺構・遺物は中世・近世のものである。つまり、北地区では古墳時代・弥生時代の遺構・遺物は検出されていない。各遺構の詳細については「祢宜弥遺跡Ⅱ」の報告書で第2次調査の結果と一緒に記述したい。

第6章 遺物

祢宜弥遺跡の遺物は北地区と南地区でその様相を大きく変えている。南地区は低湿地で弥生時代を中心とした構成であり、自然堤防上の北地区は中世・近世のものに限られている。詳しい内容については、平成13年に実施される第2次調査の成果と合わせて再検討を行いたい。ここでは出土遺物の傾向のみとしたい。

《祢宜弥遺跡南地区の遺物》

以下に記述する南地区の遺構のほとんどが菊川式土器を出土する遺構である。

・溝跡008、010の遺物

菊川式土器を出土する溝跡である。出土遺物の器種は高坏、台付き甕、壺の三種がそろっている。遺物は覆土の中層から上層の出土であり、溝内に流れ込んだものと思われる。

・溝跡025、026の遺物

カギ形に曲がる溝跡からの出土品であるが、この遺構も溝跡008、010と同じく環状に巡る溝跡の底部分のみが残ったものと思われる。共に周溝墓の可能性があると考えられる。菊川式土器の高坏、台付き甕、壺とともに小型の壺が数点出土しており祭祀的色彩の濃い遺構である。

・溝跡030の遺物

出土遺物は菊川式土器の高坏、台付き甕、壺等であり、中で台付き甕の出土量が多い。ミニチュア土器等は出土しておらず、生活臭が残る遺物の状況である。集落の基幹溝が環濠の可能性が高い。第2次調査で溝跡の続きが検出される可能性が高いのでその成果を期待したい。

・土壌009の遺物

同じく聞く菊川式土器の高坏、台付き甕、壺が出土している。埋葬関連の遺構というよりは土器を投棄した遺構と思われる。

《祢宜弥遺跡北地区の遺物》

基本的に中世・近世の遺物が多い。ただ1点、奈良時代の布目瓦が採集されているが同時代の遺構は検出されていない。

・SX1の遺物

鎌倉時代の山茶碗を1点出土している。住居跡覆土内からはその他の遺物は出土していない。

・旧河道跡の埋め立て土・堤防盛土

弥生土器（菊川式土器破片）・奈良時代（布目瓦、坏身等）・中世（山茶碗、内耳式土器等）の各時代の遺物が混在しているところから見ると、周辺の遺跡包含層を掘削した土でこの場所（北地区）が埋め立てられたり堤防が築かれた可能性が高い。1点出土している布目瓦もその中に含まれる。

・掘立柱建物跡の遺物

多数の柱穴跡が検出されているが、時期のわかる遺物は確認されていない。柱穴跡ではよくある事例であり、覆土の色調によりある程度の時期を知ることができる。

第7章 まとめにかえて

日本の考古学の黎明期、逆川・原野谷川流域に位置する遺跡は、沼津市矢崎遺跡と共に静岡県
の弥生土器の編年を考える上で先駆的な場所であった時代がある。それは昭和2年に小笠郡曾我
村（現在の掛川市。袋井市愛野地区に隣接する。）で行われた逆川の河川改修事業で、国鉄（当時）
袋井駅の駅員の1人によって土器が多数発見されセンセーショナルに報道されたのがきっかけで
あった。やがて、これを聞いた当時の静岡県史跡調査委員山崎常磐氏をはじめ、旧県史の編纂に
携わった足立鉄太郎氏、考古学研究者後藤康堂氏、西郷藤八氏、高橋勇氏、増田恭平氏等によ
って遺跡の調査研究、そして講演会や新聞紙面上でその考察が発表された。さらに、國學院大學の
樋口清之氏が現地調査を行いその成果を「静岡県小笠郡曾我村弥生式土器遺跡研究」として昭和
5年に『史前学雑誌』に発表した。本書ではその詳細に触れることは紙面の都合で避けるが、後
の弥生時代研究者の活動を触発し、菊川式土器を弥生時代後期の標識土器とする結果になったこ
とは確かである。

さて、今回の称宜弥遺跡の調査成果でも、多数の菊川式の弥生土器が出土しており、東遠江地
方の編年の基礎資料として袋井市鶴松遺跡、徳光遺跡の資料とともに良好なセット資料が提供で
きたと考えている。遺物の内容については遺構の広がり等を考えて第2次調査の成果と合わせて
公表したい。

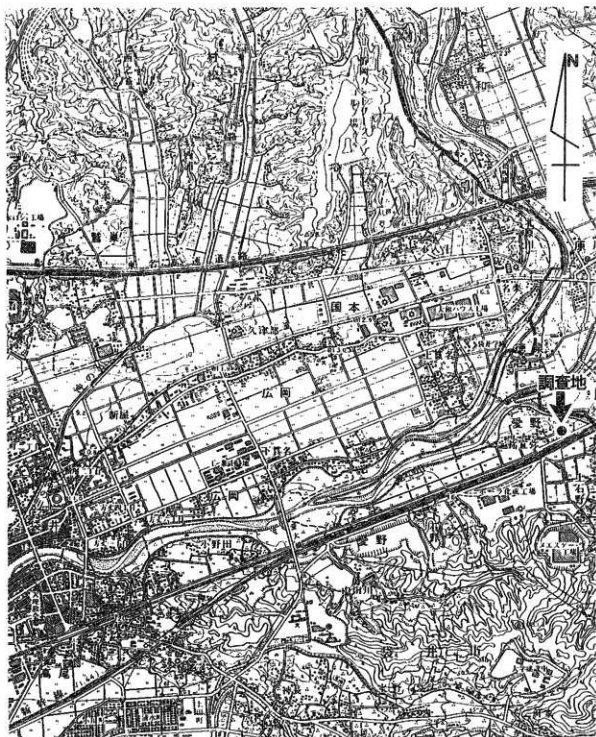
調査結果より、称宜弥遺跡では蛇行する逆川の傍らの低地で洪水に怯えながら弥生人たちが生
活をしていたことは、水田経営以外に彼らが逆川・原野谷川を利用した交易に係っていたのだ
ではないかと想像ができる。これはやがて、古墳時代・奈良時代・中世になっても称宜弥遺跡の占
める位置は変わらず、逆川と原野谷川を遡る分岐点として、また中継地点として数次の洪水にあ
いながらも、狭い自然堤防上が人々の営みを支えていたことが推測できる。

最後になったが、埋蔵文化財の保護に対して全面的に協力していただいた建設経済部区画整理
課と袋井市称宜弥土地区画整理組合の皆さんに対して深い感謝を表したい。

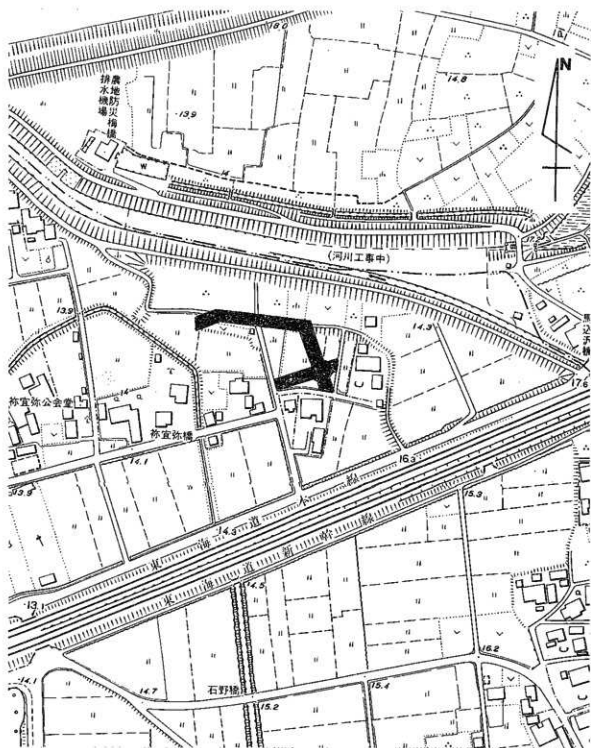
(参考文献)

- 樋口清之 1930 「静岡県小笠郡曾我村弥生式土器遺跡研究」『史前学雑誌』第2巻 史前学会
西郷藤八 1931 「遠江考古資料四件」『考古学雑誌』第21巻 第5号
吉田富夫 1938 「遠江国及び駿河国の弥生文化」『考古学』第9巻 第1号
加藤芳朗 1985 「土橋遺跡をめぐる地形・地学的背景」『土橋遺跡』袋井市教育委員会
袋井市教育委員会 1987 『愛野向山A-2・3・4号墳』
袋井市教育委員会 1988 『愛野向山A-8号墳 愛野向山墳墓群 愛野向山IV遺跡』
袋井市教育委員会 1900 『若作遺跡 若作古墳群』
静岡県 1990 『静岡県史 通史編1 原始・古代』
静岡県 1994 『静岡県史 資料編1 考古1』
掛川市教育委員会他 1994 『静岡県掛川市曾我後遺跡発掘調査報告書』
(財)静岡県埋蔵文化財研究所 1997 『小笠山総合運動公園内遺跡群』

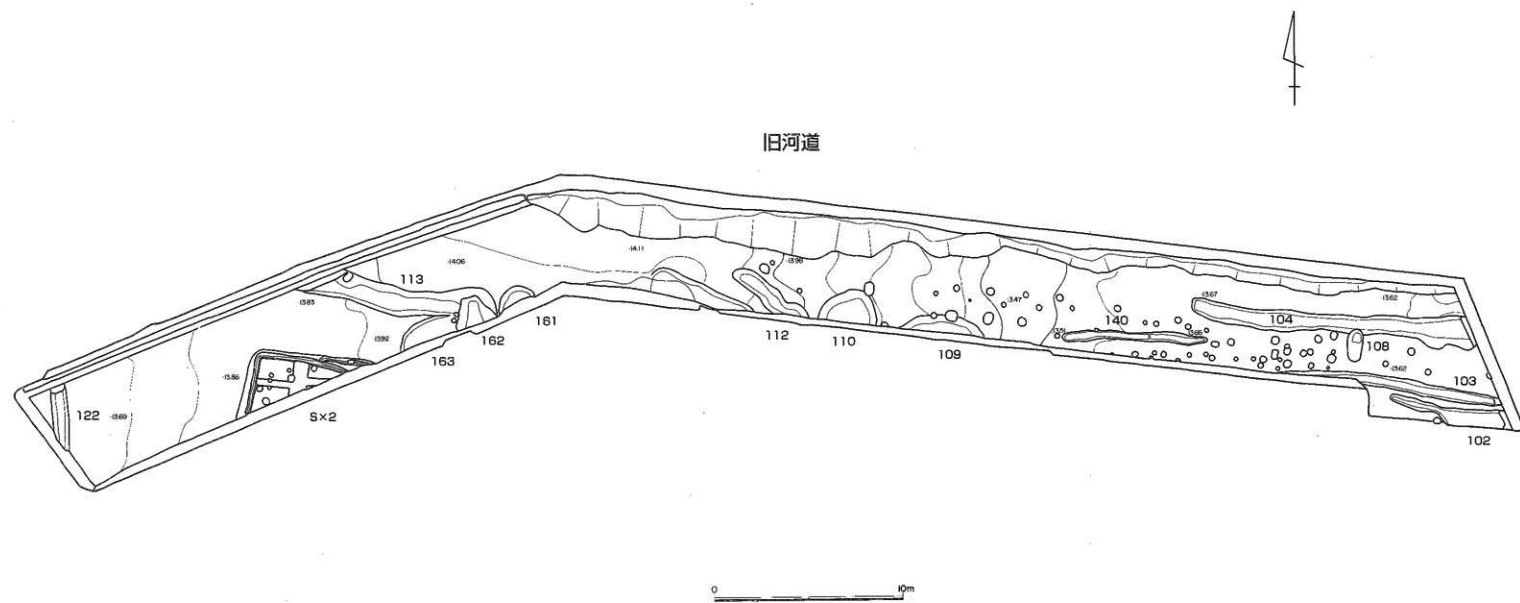
插图



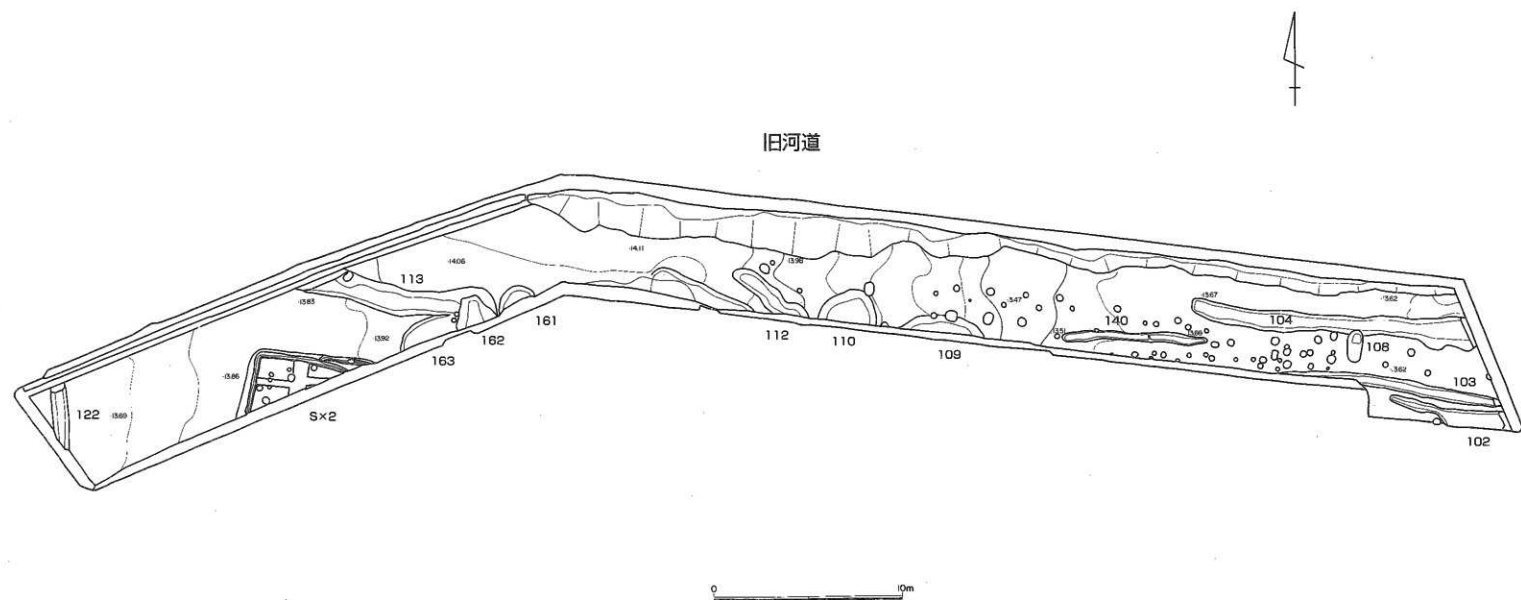
第1図 杵宜弥遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 祢宜弥遺跡発掘調査地点 (1/2,500)



第4图 祿宜弥道跡北地区実測図 (1/200)



第4图 祿宜弥遺跡北地区実測図 (1/200)

写真図版



(1) 北地区完了写真。(西より)



(2) 南地区完了写真。(西より)



(1) 重機による表土除去作業



(2) 遺構の発掘作業



(1) 南地区完了写真(西より)



(2) 全景(南東より)



(1) 南地区東側完了写真(北西より)



(2) 発掘調査のようす



(1) 土坑009遺物出土状況(北より)



(2) 土坑009完了写真(南より)



(1) 発掘調査のようす



(2) 遺物出土状況



(1) 溝跡025 弥生土器出土状況



(2) 溝跡008の発掘のようす



(1) 溝跡010 土器出土状況



(2) 溝跡025 出土状況



(1) 溝跡030の発掘のようす



(2) 溝跡030の弥生土器出土状況



(1) 溝跡030の弥生土器



(2) 溝跡030 完了写真



(1) 北地区 完了写真(東より)



(2) 北地区 完了写真(西より)



(1) 旧河道の完掘写真 (西より)



(2) 旧河道の発掘のようす



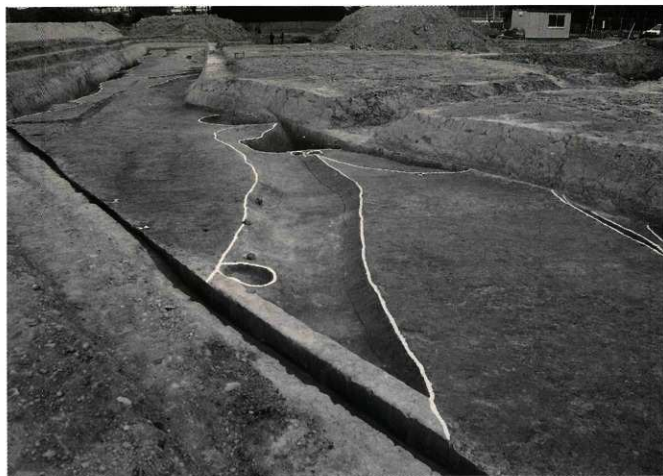
(1) 北地区 柱穴群 (北より)



(2) 北地区の柱穴群 (東より)



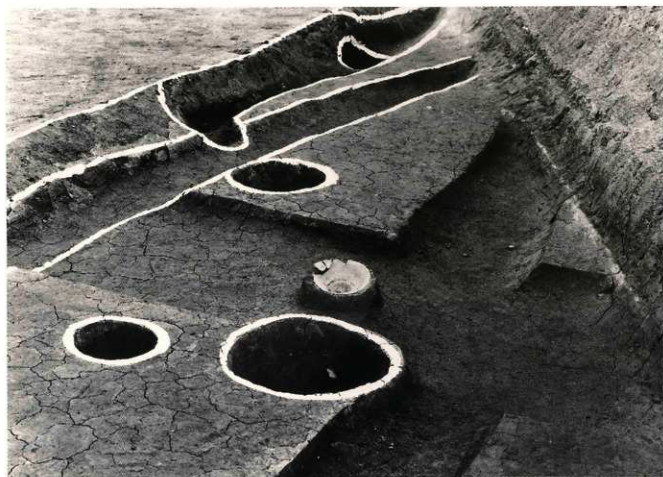
(1) 北地区の発掘のようす



(2) 北地区溝跡113の完掘のようす



(1) 中世の住居跡S×2 (西より)



(2) 住居跡S×2より出土した山茶碗

報 告 書 抄 録

ふりがな	ね ぎ や い せ き						
書 名	祢 宜 弥 遺 跡 I						
副 書 名	平成10年度 袋井市祢宜弥土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書						
編 集 者 名	永井義博						
編 集 機 関	袋井市教育委員会						
所 在 地	〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 TEL 0538-44-3141						
発 行 年 月 日	2001年3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯 ° . ' "	東 経 ° . ' "	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
ね ぎ や い せ き 祢宜弥遺跡	しずおかけんふくろいし 静岡県袋井市 あいの 愛野	22216 新規	34° 45' 00"	137° 57' 50"	1998 ↓ 1999	1,200㎡	袋井市祢 宜弥土 地区画 整理事 業に伴 う道路 建設工 事
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
ね ぎ や い せ き 祢宜弥遺跡	集 落 跡 散 布 地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中 世 近 代 近 代	住居跡、環壕跡 柱穴跡、土壇 溝跡	弥生土器 土 師 器 布 目 瓦 須 恵 器 陶 磁 器	弥生時代後期の円形 に巡る溝状の遺構や 土壇、古墳時代の土 壇、多数の柱穴跡が 検出曝れている。		

祢宜弥遺跡 I

(平成10年度 袋井市祢宜弥土地区画)
(整理事業に伴う発掘調査報告書)

2001年3月

編集 静岡県袋井市新屋1-1-1
袋井市教育委員会
☎0538-44-3141

印刷 静岡県榛原郡吉田町片岡2210
松本印刷株式会社